

第7分科会

主体性のある子どもを育てる遊びや生活を考える ～子どもの育ちに寄り添う保育をめざして～



発表者 朝倉佳奈子（認定こども園 鳥取第二幼稚園）
指導助言者 前田 恵子（鳥取県教育委員会事務局
小中学校課幼児教育センター）
司会者 成川 洋子（認定こども園 鳥取第二幼稚園）
記録者 山本 直美（認定こども園 鳥取第二幼稚園）
池成 典子（認定こども園 鳥取第二幼稚園）

1 発表の概要

（1）主題設定の理由

平成30年4月施行の新・教育要領では幼児教育の質の向上を図ることが示された。幼児が身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね遊びが発展し生活が広がる重要性については、従来と変わらず幼児教育において大切にすべき点として挙げられている。

本園の子ども達の姿を見ると、戸外遊びを好みサッカーや鉄棒、砂遊びを楽しんだり、リサイクル材を使って制作活動をしたりする姿がよく見られた。しかし中には、保育教諭に依存的な姿も見られ、家庭での経験の少なさや自信のなさ、また興味・関心の偏りなどの課題があると感じた。そこで、子ども達が遊びに主体的に関わり、遊びや生活を広げることができる環境構成の工夫や保育教諭の援助や言葉かけはどのようなものが適切か、子ども達の心情の変化や成長していく姿に注目し研究を深めたいと考えた。

（2）取り組みについて

今年度で三年目を迎えるが、大きく3つの柱を立てて研究を深めてきた。

【研究1】保育場面における幼児の主体性の捉え方について話し合う。

- ・主体性と自主性の違いについて
- ・主体性のある子ども、主体的な生活とはどのようなものか
- ・主体性のある子ども・主体的な生活を送るためには、どのような支援・環境が必要か

【研究2】カリキュラム・マネジメントを図る。

- ・自園の教育カリキュラムの見直し
(期案・週案に主体性を育むためのねらいや活動を明確に記載する。)

【研究3】各学年のテーマ・めざす子どもの姿を設定し、実践する。

- ・保育の記録をとり、子ども達の主体性の育ちを見取り、保育の改善に活かす。

(3) 実践例

【研究1】

「保育場面における幼児の主体性の捉え方について」全職員が自分の考えをレポートにまとめ、研究会で持ち寄り、共通理解していくことから始めた。

<主体性と自主性の違いについて>

保育場面に置き換えて「主体性」を考えると『友達や保育教諭との関わりの中で、状況を踏まえながら、自分が何をすべきか考え、判断して、意欲的に行動できること』ではないか、と話し合い、共通理解を図った。

<主体性のある子ども、主体的な生活とはどのようなものか>

- 自己を発揮する。 ○遊びや生活の中に目的や目標をもつ。
- いろいろな事に興味・関心をもって自ら意欲的に関わっていく。
- 自分で遊びを選択し、自ら遊びを展開し、自ら問題を解決しようとする。
- 生活習慣や社会（園）での約束事や遊びの中のルールを理解し、行動しよう（守ろう）とする。

<主体性のある子ども・主体的な生活を送るためには、どのような支援・環境が必要か>

- 保育教諭と子どもが信頼関係を確立し、自己肯定感を高める。
- 豊かな遊びの経験（遊び込める空間や時間の確保）
- 保育環境の工夫（子どもが主体的に過ごせる空間作り） ○保育教諭の関わり
- 異年齢児との関わりの中での育ち合い ○保護者への啓発

以上のことを踏まえ、支援・環境を見直し、年齢や発達を踏まえながら各学年で主体性に対する「ねらい」を系統化する。

(実践事例) 令和元年度 2歳児 活動名「じぶんで できるかな？」

2歳児クラスになると生活のスタイルが1歳児クラスとは異なり、生活習慣の方法が急激にかわる。自分でできることも少しずつ増えてたり成長が著しいこの年齢の人的・物的な環境構成の工夫は、とても重要だと考え、研究をしてきた。子どもの動線を考え、自分で荷物やタオルをかけたり、物の仕分けをしたりしやすいような環境作り（机の配置・表示等）をしていくことで、子ども達は、身の周りの物を片付ける場所や生活の流れを覚え、自分で考えながら行動できるようになった。

【研究2】

H28年度から、カリキュラム・マネジメントを図ってきた。

自園の教育カリキュラムの見直しを行い、年間計画・期案・週案に主体性を育むためのねらいや活動を明確に記載する。主体性を育むための工夫がわかるように、●で記載した。

週案の中にも、●で記載し、自己反省にも意識しながら振り返りを行い、記録をしていくことで、期ごとにカリキュラムを見直し、次年度に向けて改善していくことを行っている。

【研究3】

(実践事例①)平成29年度 年中組 学年テーマは「ドキドキワクワク！やってみたい！」

活動に取り組む意欲を育てるためには、子ども達がやりたくなるような環境構成の工夫をしようと考えた。子ども達の意欲を高めるために、誰もが興味をもちやすい「忍者」の力を借りることにした。1年間、「忍者修行」と題して、いろいろなことにチャレンジした。

<環境構成の工夫>

- ・子ども達の修行への思いが途絶えないように、保育室や階段エントランスに忍者からの巻き物を提示し、いつでも目に見えるようにした。
- ・忍者修行がどこまで進んでいるのか、達成感を味わえるようにゴールまでの道のりを表示し、点シールでコマを進めていった。
- ・活動に偏りがでないように、運動遊びは「赤巻物」・制作遊びは「黄巻物」・知的な遊びは「青巻物」で子ども達に届けた。保育教諭も意識して、活動内容を考えた。

<課題点>

- ・子ども達の意欲を高める活動となったが、主体的な育ちという視点から見ると、子ども達が自ら目的をもち、それを達成するために自分で考え、判断し行動する姿はあまり見られなかった。「巻物に書かれた内容の修行を頑張ること」＝「主体的な姿」ではないのではないかと感じた。

(実践事例②)平成30年度 年長組 活動名「お化け屋敷屋さんごっこ」

前年度に忍者修行をしていた子ども達が進級し、年長組になった取り組み。就学前の大切な1年間で、「なかま」を意識して、一人ではできないことも、みんなの力を合わせると、いろいろなことができることを経験してほしいと思い、そのための環境構成や保育教諭の援助の仕方などを改めて考えた。

<環境構成の工夫>

- ・子ども達がいつでも自分達がイメージした遊びが展開できるように、リサイクル材やいろいろな素材の材料・用具を準備しておき自由に選べる、使える環境を整えた。
- ・継続的に遊び込める時間・空間を確保するよう、廊下を制作作業コーナー・保育室をお化け屋敷として使い、登園後いつでも自分達がやりたい時に活動できる環境構成を行った。
- ・1ヶ月・1週間・1日のスケジュールの掲示を行い、子ども達自身が見通しをもって遊びの予定を立てることが出来るようにした。
- ・友達と考えを出し合う時間を作り、紙や鉛筆で設計図や必要な物を書き、イメージの共有化・明確化を行った。
- ・子ども達が自分の考えを友達の前で発表する場を準備した。

<課題点>

- ・協同的な活動が展開され、クラス・学年全体での育ちの場となったが、一人一人の育ちを見てみると、まだ消極的で自分の思いを表現できていない子どももいた。
- ・「おばけ屋敷屋さんごっこ」では保育室全部を使って活動をしたが、保育室の使用が難しくなり、給

食を廊下で食べたり、誕生会・英語教室などの行事の時に他クラスに協力をしてもらって使わせてもらったりと大変なこともあった。子ども達が継続して遊ぶ込める環境作り、場の確保は難しいこともあるが、主体的に活動するにあたって重要だと改めて感じた。

(実践事例③) 令和元年度 年長組 活動名「お寿司屋さんごっこをしよう」

昨年度までに、お店屋さんごっこやおばけ屋敷屋さんごっこなど、年長組へ遊びに行ってきた多くの刺激を受けて遊びの経験を積んできた子ども達。「こうしたい」という思いを声に出したり、アイデアを出したりする姿が多く見られた。日々いろいろな子どもが関わり 試行錯誤しながら作っていく様子が見られた。

<環境構成の工夫>

- ・子どもの思いに寄り添い、必要に応じてヒントを与えたり、様子を見守ったりしながら子どもたちのアイデアが実現するようなりサイクル材やいろいろな素材の材料・用具を準備しておき自由に選べる、使える環境を整えた。

<課題点>

- ・保育教諭がどのタイミングで、どのようにヒントを出すか、主体性を育むための援助としてバランスの難しさを感じました。
- ・長期間の遊びになった場合、子ども達の意欲を継続することが課題。

(4) 反省と考察

○主体的な遊びが中心となる【幼児部（5歳児・4歳児・3歳児）】

<保育教諭の学びと気づき>

- ・保育教諭の環境構成（人的・物的）の工夫の重要性を感じた。
- ・遊びが継続できる環境づくり（材料・場所・時間の確保）をすることで、子どもの気持ちが途切れず、遊びを楽しんでいるように感じた。しかし、保育教諭の思いが強すぎても、準備のしすぎもよくないということも学んだ。

<子どもの育ち>

- ・友達との関わりが増えたことで“自分でやってみる”から“友達とやってみたい”へと心情の変化が見られた。
- ・視覚的表示を貼ることで、自分で見て見通しをもって行動する姿が増えてきた。

<課題と今後の取り組み>

- ・遊びが継続するように場所・材料の確保・十分に遊ぶことのできる時間の確保をしていきたい。
- ・集団としての主体性の育ち、個々の主体性の育ちをしっかりと見とり、個々の育ちを伸ばしていけるような工夫をしていきたい。

○主体的な生活が中心となる【乳児部（2歳児・1歳児・0歳児）】

<保育教諭の学びと気づき>

- ・子どものモデルは、保育教諭。見本をしっかりと見せることの大切さを感じた。

- ・信頼関係の確立がとても重要。子ども自身の心の安定が成長に繋がることを実感した。

<子どもの育ち>

- ・大好きな先生達に優しく見守られているという安心感の中で、出来ることが増え、次への意欲へとつながる。
- ・日々の経験の積み重ねから、身の回りのことなど自分でできることが増えてきている。

<課題と今後の取り組み>

- ・個人差・月齢差の大きい乳児部の子ども達の育ちを見とり、保育教諭の待つ姿勢、働きかけるタイミングを見極めていきたい。
- ・身の回りのことができるようになってきた自信を遊びや他の活動の意欲へ繋げていきたいと思う。

(5) 今後の課題

【研究1】

- ・継続して研究をしていくために、今までの研究の取り組みについてしっかりと共通理解を図りたい。

【研究2】

- ・P（計画）→D（実践）→C（チェック）→A（改善）からP（計画）に戻るPDCAサイクルに基づいて常にカリキュラムの見直しを行っていきたい。

【研究3】

- ・個々の育ちをよりよく見取るために、多面的評価ができる工夫を行いたいと思う。
→園全体で子どもの育ちを見守るためにいいことメモで様々なところで遊んでいる子どもの育ちを知らせ合うことにした。
- ・「各学年のテーマ・めざす子どもの姿」の一覧表をいつでも見ながら、見直しを朱書きしていきたい。
- ・保育の記録を取る中で、「主体性の育ち」という視点だけではなく、「育みたい資質・能力の三つの柱」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点からの見取りも行い、一人一人の育ちに寄り添う保育を行いたいと思う。

2 研究討議

(1) 発表内容に対する質疑応答

Q: お寿司屋さんごっこの中で子ども達が主体的に活動されていますが、先生の反省の中で保育教諭の援助とバランスが難しかったとありますがどういったことが難しかったのか教えてください。

A: 遊びが停滞する時にヒントを出すのが、あまり口を出しすぎると子どもの主体性ではなくなってしまうということもありますが、ヒントを与えないと遊びが進まなかったり、ヒントを与えて引っ張り過ぎたりしてもいけないと思う中、子ども達の思いも大切にしながら援助することの難しさを感じた。

Q：皆さんの園で子ども達が主体的に活動している姿だと感じられる様子を教えてください。

(第二幼稚園)

A1：幼稚園にあるブロックで車をよく作っているが、その作っている子どもが「車を作りたい！」
「線路を作りたい！」とお家から空き箱やカップを用意して持ってきていたことに主体的に活動している姿だと感じられた。

A2：園で鳥骨鶏を3羽飼っており、名前が付いてなかったことから名前を付けたらもっと親しみを感
じて関わられるようになるかもしてないという保育教諭の願いから名前を付けた。3羽の鳥骨鶏と親
しみがもてるよう鳥骨鶏に子ども達が触れる機会を与える為にクラスで会議を開き、子ども達と一
緒に相談しながら鳥骨鶏が入れるくらいの段ボールを用意したり触れ合い方を考えたりすることで
活動に主体的に取り組む姿が見られた。

Q：今後の取り組みとして多面的評価ができる工夫を行うということがありますが、「いいことメモ」
をどのようにして活用したり、職員間で子ども達の姿をどのように見取る工夫をしたりするのか教
えて下さい。

A：子ども達の主体的な姿が見られるのは自由保育の時ではないかと感じており、子ども達が自由保
育の時にいつも自分のクラスで過ごしているということではなく、色々なクラスに遊びに行って活動
したり異年齢で関わっていたりすることがあり、担任が見えていない所での子ども達の育ちもある
のではないかとことから、「いいことメモ」としてピンクと黄色の付箋に(ピンク：主体性が育
った姿)(黄色：その他子どものいいところ・素敵な姿)子ども達の姿をメモし担任の机の上に張り付
けてお知らせをし、色々な職員目で子ども達の育ちを見守っていこうと思っている。そうするこ
とで子ども達の様々な見取りもできていくのではないかと思い今後の取り組みとして挙げている。

(2) 全体討議(0・1・2歳、3歳、4歳、5歳各学年のグループに分かれる)

★2色の付箋に①環境や援助(どうしているのか)②課題に感じていることを各自が記入
し模造紙に張り付けていく。

<0・1・2歳児>

①道具や個人のマークの表示の環境を整えたり遊びの道具の量を十分に準備したりする。

①付箋やメモに子どもの姿を記録し職員間で共通理解ができるように話をする。

①栽培活動を通して水やりをしたり野菜の収穫をしたりすることで食べることの意欲に繋がるように
援助している。

①保育者が進んで取り組んでいる姿を見て子ども達が真似て活動ができるようにする。

①主体的に遊べるようなコーナー作りをする。

②消極的な子どもへの働きかけや一つの取り組みに皆が同じ気持ちで取り組むことが課題。

②十分な種類の材料や道具など、準備ができていないことが多いと感じており、年齢に応じた遊びの
道具や材料の準備をすることの環境設定が課題。

②子どものへの言葉掛けが保育士主動になっている。子ども達が主体的に活動することができるよう

な言葉掛けを課題とする。

< 3歳 >

- ①自分のロッカーや下足箱が分かるように個人のシールを貼って身の回りのことを自分で行えるように援助している。
- ①異年齢保育で年上のお兄さんやお姉さんに憧れをもちながらやってみたいと思い挑戦することが主体性に繋がっていると感じられるので異年齢保育に力を入れている。
- ①保育者との信頼関係を築くことが大切だと感じている。
- ①玩具ではリサイクル材を十分に用意したり活動では親しみがもてる題材を設定したりしながら子ども達の意欲を高めさせている。
- ①チャレンジカードを使って、できた喜びを感じられるようにしていき、できた喜びが次への意欲に繋がるよう援助している。
- ②子ども達を認める際、単純に「できたね!」「すごいね!」と評価だけになってしまっている。どこがすごいのか、きっかけは何だったのかと子どもの見取りが浅いと感じている。
- ②声掛けが多かったり、保育者が先に答えを出してしまったりすることがあるので、子ども達の様子を見守ることも大切だと課題に感じている。
- ②遊びがなかなか続かない際、どのようにして子ども達の気持ちを持続していくのか課題に感じている。

< 4歳 >

- ①1日の流れ、月の流れ、時計を分かりやすく表示し、見通しをもって生活することができるようにしている。
- ①制作が楽しめるように廃材やリサイクル材を子ども達が自由に選んで使えるように設置している。
- ①飼育に関して、自分で調べられるように図鑑や虫眼鏡を用意している。
- ①泥んこ遊びが充実するよう、言葉掛けや玩具の環境を整えている。
- ①保育者との信頼関係を築き、自己発揮できるように言葉掛けを工夫して関わっている。
- ①栽培活動では育てている野菜の関心が高まるように援助している。
- ②スケジュールの関係上遊びこめないまま途中辞めになってしまったり遊びがそのままになってしまったりしている。時間の確保が課題と感じる。
- ②保育者の言葉を聞いてから遊び始める子どももいる。不安に感じないように援助することが課題と感じる。
- ②遊びの中で、動きが多い子どもに対して遊びを制限してしまわなければならない面がある。子どもの協調性を大切にしていきたい。

< 5歳 >

- ①視覚を通しての環境の設定を行っている。また、季節感を感じられるような環境を配慮している。
- ①自由遊びの際には、好きな遊びが選べるようにしている。
- ①廃材コーナーを作って、子どもが使いたいものを自由に使えるようにしている。

- ①異年齢の関りとして朝登園した時に未満児のクラスに遊びに行ったり週1回のペースで年長さんと交流できるようにしたりしている。
- ①イメージがなかなか浮かびにくい子どもに対して、1対1でゆっくり話しながら援助したり、遊びのヒントを出したりしながら援助している。
- ①時間の確保を大切にしている。
- ①職員間で多数の目で子ども達の姿を見守っている。
- ②年長の行事に追われ、時間の確保がなかなか難しい。
- ②異年齢の関りはあるが、なかなか関りが深められていない。年長と年中の関りになってしまい、未満児との関りができていないことが課題に感じる。
- ②主体性として様々なことを初めから諦めてしまう姿が見られたり、継続が難しかったり、すぐに完成を求めてしまったりする姿が見られる子どもに対しての援助が課題に感じている。
- ②子どもの見取りとして、職員間で共通理解する時間の確保が難しいと感じる。
- ②決められたことを指導していく保育であることも課題に感じる。

3 指導助言

1. グループ協議について

「主体性」を中心としたグループ協議において、課題として挙げられた点、課題に感じていること4つを下記の様な視点で考えてみるのはどうか。即、課題解決にはならないかもしれないが1つのヒントとして提示する。

- 子どもたちの姿で遊びに対して消極性の子がいる。これもひとりひとりの特性。その子の苦手なことばかり見るのではなく、その子の得意なところも見ていくようにする。その子なりの主体性を発揮する遊びを見て、伸ばし、苦手なことへ取り組むようにする。
 - ・大人が子ども達に日ごろ声かけしていることは、結果の評価（「できた・できない・友達よりできたね。」など）になってはいないか。子どもたちの評価は結果ではなくその過程が大切。過程を認める言葉がけが必要。
 - ・友達や異年齢のモデル・あこがれ 大人ではなく子どもをモデルにすることによって子ども達の消極性が改善されることもある。
- 保育時間の差による遊びの連続性・継続性が難しい。全体的な計画を作成する中で、預かり保育の指導計画を立てる。その中で教育過程（教育標準時間）と教育過程時間外（預かり時間）の連続性を持たせていくことが大事。指導計画を改善、見直ししていくことが大切。担任と預かり保育の先生の引き継ぎも大切である。
- 時間の確保→業務改善も大事だと言われているが、園内で時間が確保できるよう工夫したり、子ども達がいる時間帯と一緒に環境の準備をしたりすることもできる。子ども達のやりたいことを自分たちで準備することで主体性につながっていく。
- 幼児理解に基づいた評価の難しさ、見取り、先生の主観になっていないかどうか自信がない。みんなで話し合う時間の確保が難しい。→短時間で出来る話し合い。話し合いの時間を作らなくても出来る評価のあり方、やり方をいろいろな方法で見つけて欲しい。

2. 幼児期の教育において「主体性」を育むために

幼稚園教育要領・認定こども園教育・保育要領は0歳～18歳（高校）まで一貫性のあるものとして示されている。「主体的・対話的で深い学び」の最初の教育の部分になっているのが幼稚園・認定こども園・保育所である。幼児期の教育における【主体的・対話的で深い学びの実現のため】に「主体的な学び」とは周囲の環境や関心を持って積極的に働きかけ、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次に繋げる。保育者は絶えず指導の改善を図っていくこと。

【主体的・対話的で深い学びの実現するために保育者が念頭に置くこと】

- 一人一人の子どもが体験していることを理解しようと努める。
- 子どもの体験を保育者が共有するように努め、共感する。
- どのような興味や関心が子どもの心に生じてきたのか理解する。
- 体験から子どもが何を学んだのかを理解し、学びをさらに深めたり、発展させたりすることができるように環境を構成する。
- ある時期の体験が後の時期のどのような体験とつながり得るのか、見通しをもつこと。

【「主体的な遊び」とは何か。】

- やりたいことをみつける。
- 自分からいろいろなことに興味や関心を示す。
- 言いたいことを伝える。
- 周囲の状況をふまえて自分が何をすべきか考えて行動する。

子ども達が、生涯にわたって集団生活を送ったり、学んだりする上での基盤となるのが幼児期の遊びである。

〈鳥取県のめざす幼児の姿〉遊びたい（意欲）→（自ら）遊びだす→十分に遊び込む→遊びきる この遊びの過程を大事にしていくことで、主体的な姿が遊びの中で培われていくのではないか。でも、そのためには、育ちや学びを促す環境を保育者がいかに豊かに準備していくかが大事。重要なのは、「自ら働きかけ、心を動かし、自ら考え、判断し、行動したくなる」ような環境であり、子どもたちのつぶやきや言葉から環境を構成していきたい。

【集団の中で「主体性」を育むため】に、まずは、保育者自身が主体的であること。目の前の子ども達の様子を見ながら計画を変え、改善しながら考えていく。そして、

- 刺激となり、対象となるものや現象・人
 - 影響を与える友達、保育者
 - ゆったりとした時間
 - 遊びが継続できる空間
- が大切。

鳥取第二幼稚園の取り組みからは、主体性のある子どもを育てるために「環境の構成」として、

- 安心して取り組める、意欲が高まる環境（可視化など）
- 人と関わりたくなる・関わらざるを得ない環境
- 人と関わりやすい環境
- 試行錯誤や工夫が生まれやすい環境
- イメージや目的の共有が生まれやすい環境
- 思考を促し、考えたこと・思ったことを伝えたくなる環境の工夫がある。

また、「保育者の援助」としては、低年齢は、

- 安心して取り組む、意欲が高まる援助
- 周囲の人・友達とつなぐ援助

3歳以上児になると、

- 見守る・待つ
- 思考を促す
- 共同を促す

の援助が大切であり、発達段階に応じた援助をしていたことがよく伝わる。

3. 認定こども園 鳥取第二幼稚園の取り組みを通して

鳥取第二幼稚園の取り組みから学んだこととして、

◎継続的な研究の積み重ねの大事さ→平成27年度から「主体性」を大切に研究を積み重ねている。

職員の入れ替わりもある中で、継続的に同じテーマで積み重ねているからこそ見える子ども達の姿や保育者の気づきがある。

◎全職員の共通理解に基づく実践→研究3として、「主体性のある子どもの姿」の仮説と年齢の発達段階を共通理解した。共通実践・共通理解ができるのは園の強みで素晴らしさである。共通理解にもつながると思うが、未満児は生活を大事に、そして充実することからスタートしているところが園の研究の積み重ねの良いところである。

◎柔軟な発想・創意工夫（・育てたい子どもの姿を見通し、一貫した指導計画を作成・小学校区の園、小学校のつながり）→平成27年度からどの年齢の年間指導計画にも「主体性のある子どもの育成」を入れてあるのが素晴らしい。また、年間計画に研究テーマが入っているのは珍しい。大事にしたいところを明確にしなが、小学校区の取組→全体的な計画→年間指導計画→起案→週案にも下ろし、カリキュラム・マネジメントを研究テーマに沿って確立させているのが園の強みである、共通理解をし、積み重ねの素晴らしさがここにある。系統的に研究を進めていると感じた。

それぞれの園でのやり方はあるが、その園の貫いているものは何か。というところを「園のめざす子ども像」とつなげて考えていくことも大事。その園で大事にしたいことは何かという視点で、年間計画などを見直して欲しい。

そして、「園児の主体性」と「保育教諭の意図」とをバランスよく絡ませていくことが大切である。バランスよくと言っても、活動の主体は、園児であり、保育教諭は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成するということで日々の保育を展開して欲しい。そのためには、園児の立場に立った教育及び保育の展開をするが大事。

大会のテーマでもある「子どもたちの今と未来の幸せをねがって」そして、「主体性のある子ども」今、求められている子どもの姿だと思う。一緒に鳥取県の子どもを育てる仲間として、今後も教育・保育を頑張っていけたらと思う。